高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌
一首并せて短歌

一九九番

かけまくも　ゆゆしきかも　言はまくも　あやに恐き　明日香の　真神の原に　ひさかたの　天つ御門を　恐くも　定めたまひて　神さぶと　岩隠ります　やすみしし　我が大君の　きこしめす　背面の国の　真木立つ　不破山越えて　高麗剣　和射見が原の　行宮に　天降りいまして　天の下　治めたまひ　食国を　定めたまふと　鶏が鳴く　東の国の御軍士を　召したまひて　ちはやぶる　人を和せと　まつろはぬ　国を治めと　皇子ながら　任けたまへば　大御身に　大刀取り佩かし　大御手に　弓取り持たし　御軍士を　あどもひたまひ　整ふる　鼓の音は雷の　声と聞くまで　吹き鳴せる　小角の音も　あたみたる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるまでに　ささげたる　旗のなびきは　冬ごもり　春さり来れば　野ごとに　つきてある火の　風のむた　なびかふごとく　取り持てる　弓弭の騒き　み雪降る　冬の林に　つむじかも　い巻き渡ると　思ふまで　聞きの恐く　引き放つ　矢のしげけく　大雪の乱れて来れ　まつろはず　立ち向かひしも　露霜の　消なば消ぬべく行く鳥の　争ふはしに　渡会の　斎宮ゆ　神風に　い吹き惑はし　天雲を　日の目も見せず　常闇に　覆ひたまひて　定めてし　瑞穂の国を神ながら　太敷きまして　やすみしし　我が大君の　天の下　奏したまへば　万代に　然かしもあらむと　木綿花の　栄ゆる時に　我が大君皇子の御門を　神宮に　装ひまつりて　使はしし　御門の人も　白たへの　麻衣着て　埴安の　御門の原に　あかねさす　日のことごと　鹿じもの　い這ひ伏しつつ　ぬばたまの　夕に至れば　大殿を　振り放け見つつ　鶉なす　い這ひもとほり　侍へど　侍ひえねば　春鳥の　さまよひぬれば　嘆きも　いまだ過ぎぬに　思ひも　いまだ尽きねば　言さへく　百済の原ゆ　神葬り　葬りいませて　あさもよし　城上の宮を常宮と　高くしたてて　神ながら　しづまりましぬ　しかれども　我が大君の　万代と　思ほしめして　作らしし　香具山の宮　万代に　過ぎむと思へや　天のごと　振り放け見つつ　玉だすき　かけて偲はむ　恐くありとも